

## 四月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

「翁」の文字

高野公彦 千葉

老いてなほ知らず面舵おもかぢのへ画の意味、夕焼け小焼けの（小焼け）の意味も  
一晚に九時間眠りまだ眠しながながと見る雑夢ざつむのせぬか  
（人嫌ひ）兆す時あり年取れば人に頼らぬ暮らしは無きに  
なめらかな等圧線の天気図の美しさ言ふ富山の人あり  
来し道を峠より見て楽しめり「翁」の文字に棲む公彦は

秒針の音

田宮朋子 新潟

歌はわがひとり遊びの独楽こまふりガラス戸のそと雪降りしきる  
寒風を受けつつ走る駅伝こまふりの若者らよし戦なき国  
寒に入り外はあかるき雪日和とほくかすかに児らが呼びあふ  
寒の内なれど畑の雪大根採るに障りのなきほどの雪  
明けがたの秒針の音かつかつと聞こえて消えて聞こえて目覚む

センチタリアン

清水正子 神奈川

さくら貝さながらの爪愛らしもアンクレットを試着の素足  
うなぎ焼く匂ひに足を止めたれど駄目！急がねば ピアノを聴きに  
鍵盤をたたく白き指みてゐたり急流下りの小舟となりて  
春くれば卒寿のわれは呆けもせずセンチタリアン目指せるかしら  
「二十億光年の孤独」書架にあり箒星追つて詩人は逝けど  
母の愛車  
鈴木千登世 山口

潮風の通ふポーチにやすみたる母の愛車に見えぬ鏽あり  
免許証返納決めてなほ迷ふ母をり疾うに運転止むに  
女性まだ運転をせぬ時代にて母は免許を得て職を得き  
古家に眠る車を運転す母の愛車はひひらぎの色  
助手席に団栗ひとつ坐まじせり拾ひし母の片割れのごと

☆

☆



桑原正紀 東京

いちぐわつの下旬なれどもさんぐわつの陽気に早もぶゆは群れとぶ  
とほからず百億を超す人類の今世紀後半餓死者増ゆべし

奪ひ合ひはもう始まつてゐる ウクライナもガザも縮小未来凶にして  
自国ファーストすなはち他はどうでもいいそんな本音がまかりとほれり  
トランプの悪党づらを見るたびに人類の滅び近づくをおもふ

狩野一男 東京

ここからがスタートだつて? もう遅い「最初にこれをやればよかつた」

「老後」とは幾つごろから言ふならむ七十三のわれ悩みをり

男女とも、六十七歳くらゐから「老後」と思つてゐるらし。日本

問題にならぬ問題などあらぬ無法地帯へわれ生きにゆく

神仏にすぎることなく生きてきて此度はしかと祈りぬ(勝利)

宮里信輝 神奈川

令和七年一月一日年始め参拝に来ぬ「八菅神社」に

家族等の無病息災お願ひせり硬貨ではなく紙幣を献じて

「八菅山」頂上に来てながめるも盛んなる東京・横浜の景

樹木らは名札をつけて立ちゐるもネムノキ、アラカシ、スギ、オニグルミ

ヤマボウシ、ハリギリ、イヌシテ、カヤクヌギ、ヒノキ、クスノキ、アオダモ、マツよ

小島ゆかり 東京

寒満月あふぎ帰ればふくふくと猫がソファの上下にをり

古猫が大ごゑでまたわれを呼ぶ真夜中 こんなに近くゐるのに

わが知らぬ娘の好み知る人のゐてくれて「じゃあ」駅で別る

「じゃあ」といふことはも雨に打たれたりもう降りだした夜の駅頭

いまでも会ひたいあなた冬の陽のやうなあなたがだれかわからず

水島晴子 兵庫

古里にふるき家族とともにせし雑煮の彩も忘れ果てける

人参のこまかき朱を箸にとりこの正月を下心惜しみたり

年の花とほしき牆に土ちかくくれなる明る山茶花二輪

土を抜き露はとなれる幾本の根はうねりつつ樟ひと木立つ

老いて今やうやく気づく「やればできる」ときに思ひしことの驕慢

森重香代子 山口

文字時計いま変はりたり一分の意外に永し見つめてあれば

霏する傘をたためてみな往けり日差し戻りし地上に人ら

夕はやく湯浴みしてをりをみならの舗道に毬を樂しむを聞き

をみならは時をたのしむごとくにも声あげてをり夕べ舗道に

夕ぐれの舗道にひびきをみならの喚声は花のごと伝ひ来る

影山一男 千葉

冷えまとふ賀状のなかに今年なし此岸を去りし年下の名は

正月のスマホにきたる広告は「小さなお葬式8万円から」

一瞬にして死の側へ連れゆかれとまどひをらむ若きたましひ

女子高生の未完のたましひ輝けよかなしみの祈りのこゑを集めて

神保町が神保町であるゆゑの一つ金ペン堂も消えたり

木 畑 紀 子 京 都

E V の郵便バイクそつと来て落とせり喪中はがきふたひら  
年の瀬の波打ちぎはに寄せて来る喪中はがきは片貝に似る  
この町のさんかく屋根を影絵にし寒の朝焼けひときは赤し  
バスケする少年ひとり散歩する老人ひとり会釈かはしぬ  
目陰して没り日に向かひゆくわれに尻尾のやうな長き影あり

島 田 暉 神奈川

凧はどこかまはず吹きまくり夢や希望を叩き止まざる  
冬なれど少女ら集まる日向ほこわが心さへ桃色になる  
毒と火を花に秘めたる赤き薔薇朝日を受けて赤鬼笑ふ  
銀杏樹えんぎょうの金色の葉を振り落し樹は立ち続く死者のごとくに  
銀杏樹の落葉のやうに戸や窓にぶつかり落つる後半生は

大 松 達 知 \* 東 京

合意けて約束とある4行目弁護士さんのゲラのもどれば  
まったくの無から生じたわがむすめギリと略してそののちは塩  
いつかいじゃむり、と言いたりその人は、人生のこと言うように言う  
ほんものの灰を見ることすくなければ灰色ばかり左を向けば  
イヤフォンをしたまま食べる納豆は魍魎から魍魎ひいたような味  
丘のうへの竹群の揺れはるけて届かぬ音を心に想ふ  
葉と見えしがほのか厚みもちたれば蕾と知らる庭の水仙  
降る雨に高き木立もくさむらもおのがじしなる歌声をあぐ  
吊るされて姿さだまる鮫鱈スズキの次の局面おもひみるべし  
みんなみのフォーマルハウトは一つ星あたりを払ふしげさにあり

津 金 規 雄 神奈川

小 山 富 紀 子 京 都

ひと粒を待つ雀らを思ひつつ流しの米をていねいにひろふ  
殺生を常々厭ふ我なるにねずみ殺ししこのうれしさはや  
門松を一本立てては父思ひ二本立てては母を思へり  
初寅のしだれ桜に六つの花予祝よしゆくのごとくふんはり咲く  
喪の帯を解かむとすればまた計報令和七年小正月の夜

福 士 り か 青 森

のんのんと降りのんのんと積もりゆく雨の記憶をもつ重い雪  
雪かきをせむと一歩を踏み出せば雪すつぽりと膝までをのむ  
変はらない日常こそが望ましく「砂の女」は日々砂をかか  
鉄橋をわたる列車の音冴えて津軽平野ははてしなく雪  
雪かきを終へて見上げる青き空いつかは溶けるんだつたら降るなよ

藤 野 早 苗 福 岡

もう誰の娘でもなし立つたまま茶漬け吸つてもう叱られず  
花びらの縁かじかんで色褪せて冬には冬の薔薇がひらく  
「Back to the future」のビフはトランプ氏主人公を虐める敵役なり  
このまへは America first のたびは Make America great, again  
負傷兵搬送船なりしすぎゆきを「そうだったわね」とああ氷川丸  
50ー50大リーグ初フライング51ー51また大リーグ初フライング  
盗塁はすでに50、ホームラン打つて50ー50となる  
ホームランボール50ー50のボール落札六億円超ゆレインボー  
60ー60も目の前だと四つあと一つであれば  
珈琲・紅茶のカップ二、三客、小皿大皿茶碗とつてなきもののごとく積む食器棚

風 間 博 夫 千 葉

田中愛子 埼玉

善根を積む思ひにて拾ひたり 駅のかいだんの一円玉を

とほき夜の声待つ人か樹の下に 落葉のベレーかむりて立てり

QRコード、MP3、アプリ、ライン とほき潮鳴りのやうな言の葉

「コスモス」を去りて久しも自がことを(三首夫人)と呼びてあし人

雨にほふ夜のせむかしら 母恋ひの歌ばかりひいきしさうになりぬ

橘 芳 園 新潟

町主催戦勝祈願の法要を高木顕明一人拒みき

大逆の罪を負ひたる 顕明を親鸞の宗門は(擯斥)したり

仏の意にかなふことのみ書くとあり 高木顕明の「余が社会主義」

(部落)から布施は取れぬと 真宗僧高木顕明は按摩字びき

牧師らと遊郭誘致反対に立ちたる僧は 顕明一人

小島ゆかり 著書二冊

### はるかなる虹

第十六歌集  
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

### サイレントニヤー

猫たちの歌物語  
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別)

送料三〇〇円

### 蜘蛛の歌

コスモス叢書第1232篇

六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

### 大松達知歌集

令和6年1月刊 二五〇〇円(税別)

送料三〇〇円

### ばんじろう

コスモス叢書第1233篇

六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二四―一〇  
マリノホームズ1A 六花書林

### 高野公彦評論集

令和6年3月刊 二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

### 歌の魅力の源泉を汲む

コスモス叢書第1235篇

柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―一五〇六

### 斉藤梢歌集

令和6年7月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

### 青葉の闇へ

コスモス叢書第1237篇

柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町  
二―一〇―一三〇六 薄葉様方



水上 英季 神奈川

〈待合せ〉してゐる京王線車内かばんにしまふマフラー、イヤマフラー  
頭をはづしパカンと屑籠の上で逆さにしたし水曜の夜  
パソコンの画面に奥行き作りゆく「CH + E」何度も押して  
パソコンにケーブルつなぎつながらてパソコン重たく仕事してをり  
男一人叫んでゐたりちらちらと赤きリードが見えて 解決

水上 比呂美 東京

正月に次女の家族が加はりて一重まぶたの水上一族  
一歳はおむすび二十個食べましたビー玉くらゐのママのおむすび  
手が乾く時のないほど家事増えぬ娘の坊やが正月に来て  
鉛筆の端のとんぼをじつと見て娘の坊やは「ぼ、」と言ひたり  
ジーンズの腿で濡れたる手を拭きてホントの婆になりにけるかも

鈴木 竹志 愛知

大寒の真昼を妻と歩みきてまなかひにふと枇杷の花頭つ  
咲き開けて枇杷の花ありこの世には少しばかりの未練あるごと  
地味なれば愛さること乏しかる枇杷の花にも矜持はあらむ  
暖かき大寒の昼ほどけたる心のままに歩む「高津波」  
津波ではなくて津のあれば「高津波」とふ町の名のつきたると書に

原賀 璽子 東京

通帳と印鑑のありか子に教へオーンと吠える狼われは  
居残りの冬のつばめの贈りものある日とつぜん咲く草の花  
調べても調べてもつひに草の花、白きがけふは赤き実となる  
拍子木の音さえざざと夕ぐれの耳を打ちたりペランダへ出ぬ  
拍子木を打ち鳴らしつつゆく人を牧水として遠く見てをり

大野 英子 福岡

所詮ひとりと気安く言ふのは家族ある人いつだつてワタシはひとり  
いつか使ふ日がくるならん玄関の両親の杖を仕舞ふねんまつ  
おめでたうと言ふ人もなく聴いてゐるどころとも知らぬ年越しの鐘  
日章旗掲げる一軒の家がある団地の長い坂の途中に  
昭和百年といへど戦後百年といふ日は来るかワタシは居るか

松尾 祥子 東京

実をあまたみのらせて立つ蜜柑の木みづおとしまふ巳年の空に  
二歳児は迷ひに迷ひ大好きな蜜柑ひと房分けてくれたり  
ぐらりぐらり大地揺るるは幻覚かしんと垂れゐる電灯の紐  
とほき地震ゆめのなかにて感じたりわれのからだを借りたるなまづ  
加湿器の音を雨かと聞きてをり降水ゼロのつづく東京

小島 なお\* 東京

十一時に眠り、三時に起床する袈裟の義弟の霜の百日  
石を打ち散る火花から走りゆく疼痛、木々の神経の枝  
数珠提げて重なる手と手 百日をかけて互みに根の這うまでを  
白粥の白に身体が染みるまで荒行堂に雲の舌垂る  
肩を、頬を、眼窩を削る寒水は義弟から木仏を彫り出だす

小田部 雅 子 静岡

齊 藤 梢 宮城

へらくがきの現行犯に手錠して握手求めしポリスありけむ  
胴体の螺旋状なる人型がただに踊れり ダンス、ダンス、ダンス  
いのちへの絶対的な信頼の画面くまなくキースの黄色  
キース・ヘリング展をいでたる地下道に行き交ふ男も女も親し  
時代まるごとつかみだしたる絵のやうに時代まるごと詠ひたし、歌

ルミナリエの光を見たし歩みつつ神戸の冬の空気吸ひたし  
里芋をことごと煮て三十年前の非常時思ひて悼む  
新しい悲しみと古い悲しみが層なす心はこんな硬い  
咲くときは潤ひて咲くシクラメン 懸命すぎるほどにも赤い  
大雪を「のつつと降った」と言ふ父の電話の声が今日は大きい

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

土筆の味 ― 食いしん坊の子規―

つくづくし摘みて帰りぬ煮てや食はん  
ひしほと酢とにひでてや食はん

正岡 子規

芹 蓬 野蒜 野葦かぐはしき春分の  
食牲へならぬなし 築地 正子

「つくづくし」とは土筆のこと。土筆は  
スギナの胞子茎で、これを若いうちに採り、  
食用にする。節の部分のハカマを取り除き、  
あく抜きしたあと、和え物・お浸し・つく  
だ煮などにする。

春の野は、土筆のほか、食べられる草が  
たくさん生えてくる。

ここでは、セリ・ヨモギ・ノビル・ノス  
ミレが歌われている。「牲へ」はニエと読  
む。作者は、熊本県の田園地帯に住む現代  
の歌人である。春分ころは、どの草も柔  
らかく、食べられないものはない、という  
歌である。

子規の歌は明治三十五年の作。「つくし  
ほど食うてうまきはなく、つくしとりほど、  
して面白きは無し。碧梧桐、赤羽根村に遊  
びて、つくしを得て帰る。再び行かんとい

ふに、思ひやり、興じて詠める」という前  
書があつて、つくしの歌が十三首並んでい  
る。その中に右の歌がある。

子規はながく病床にあつて、外出できな  
い体であつた。この歌は、弟子の河東碧梧  
桐が摘んできたつくしを見ながら、食べ方  
を思索しているのだ。「ひしほ」は醬と書  
き、ここでは醤油のことである。「ひで  
て」は「浸して」の意。「煮て食おうか、  
それとも、お浸しにして酢醤油で食おう  
か」と、食べ方をあれこれ考えて楽しんで  
いるのである。歌集『竹乃里歌』より。

子規は食いしん坊で、食べ物の歌が多い。  
それは、病床に臥したまま動けない自分の  
命への愛惜の心と深く結びついている。こ  
の年の秋九月、子規は死去する。

(「うたを味わう」より再録)